逃げてきたようだ。もう真夜中だしこの寒さでは、朝まで歩き続けるしかないと思った。

計画もなく大した目的もなく、ただの衝動で出てきた今回の旅だった。

「初っ端から変態に遭遇するなんてパリの第一印象が悪過ぎるよ。エライところに来てしまった。やっぱり来なきゃよかった」

ブツブツ泣きごとを言いながら歩いている内に明りがこうこうと輝いている通りに出た。何軒もつらなっているカフェにはまだたくさんの人がいた。

どこでもいいから休めるところがないかとキョロキョロと見渡すと手ごろな感じのいいホテルがあった。恐る恐る中へ入ると、フロントの白髪交じりのムッシューが気さくで愛想良く対応してくれた。

通された部屋は薄暗くて狭かったが、心細さが頂点に達していた私にはこの狭い空間は天国に思えた。もう窓に近づこうとは思わなかった。この界隈はカルチエ・ラタンと言う学生街で、そして、ここが私の定宿となった。

パリ五月革命

ともかく、「ユーレイルパス」という3ヶ月間有効の鉄道乗り放題のパスを買って来ていたので、このホテルを起点に〝美術館巡り〟の旅に出た。

ドイツ、デンマーク、オランダ、ベルギー、スペイン、イタリアと東欧以外の国はほとんど周った。アムステルダムの国立美術館のゴッホや、フェレンツェのミケランジェロのダビテ像などにそれなりに感動した。

旅先から日本へ出した手紙への返事がカルチエ・ラタンのホテルに届いているのが、何よりの楽しみだった。

4月下旬に何度目かのパリに戻って来ると、カルチエ・ラタンは異様な雰囲気になっていた。窓を鉄格子で覆って武装した装甲車がサン・ミッシェル大通りに集結して、完全防備の特殊部隊らしき大勢の兵士が盾を構え、装甲車を背にして警備している。

ホテルに着くと、いつもは「お帰り！」と言ってくれるムッシューが大げさなジェスチャーで声を震わせながら、もの凄い剣幕で話しかけてきた。何を言っているのかさっぱりわからないが、異常事態になっていることだけは、よくわかった。

異様な緊張感は瞬く間に暴動となった。

警察か兵士かわからない集団がこん棒を振り回し、誰彼となく殴りかかって来る。逃げ惑うのに必死で、どこをどう走り回ったのか、どこでぶつけたのか殴られたのかもさっぱりわからないが、頭から大量の血が流れていた。

車を倒し、車道の石畳を掘り起こして抵抗している者もいたが、ひとりが逃げ出すと一斉に全員が走り出して、群れで行動する小動物みたいに私も逃げまくった。

ブティックやレストランは軒並みシャッターを下ろした。どこのレストランやパン屋が開いていると聞くと、そこに人が殺到して、まともに食事もできなくなってきた。

状況は日に日に悪化していった。

星影のワルツ

このままではいつ日本に帰れるか知れない。もしかしたら帰れなくなるかも知れないと不安に駆られたら、日本が恋しくて今すぐに帰りたい気持ちを抑えられなくなった。

どうやって帰りのチケットを取れたのか覚えていないが、数日後に、どうにかJALの飛行機に乗れた。私は生まれて初めて乗る飛行機だった。アンカレッジ経由で18時間、羽田に飛行機が無事着陸した時は機内に歓声と拍手が湧き上がった。私も感激のあまり夢中で拍手した。

羽田には友達が車で迎えにきてくれていた。首都高速から東京の街並みを通って五日市街道に入り、下宿先の小金井が近づいて来るとやたらと涙が出てきた。

ラジオからは千昌夫の「星影のワルツ」が流れていた。友達は歌を聞いて泣いていると思ったのか、

「この歌、今流行っているよ。」

と教えてくれた。緊張の糸が切れてしまって私は泣き笑いのグチャクチャの顔で頷いた。

パリ暴動のニュースがテレビに映し出されていた。カルチエ・ラタンは戦場と化していた。一週間前まで私もここにいたのだと思うと、ゾーッとして鳥肌が立った。

「もう二度とパリなんかに行くものか。」

〈パリ五月革命〉はその後、全世界に飛び火した。

私は富山県宇奈月温泉で生まれ、実家は旅館を営んでいた。旅館の裏には黒部川が流れ、その轟音を聞きながら育った。イワナやヤマメはいつも身近な魚だった。

再びパリへ

新学期から大学に戻れたが、ここにも学生紛争の嵐が吹きまくっていた。

学生が大学を占拠し校門にバリケードを張った。パリで本場の学生闘争を経験してきたのだから紛争に参加しろと、しつこく誘われたが、そんな気は全くなくバリケードを潜り抜けて、普段と同じように校舎のアトリエで絵を描いていた。いつしか大学も正常に戻り、恋あり、暇あり、自由ありの青春時代を謳歌した。

学生生活も残り少なくなったころ、「戸出がまたパリへ行くらしい」との噂がひとり歩きし出した。

もうパリはこりごりで、絶対に日本を離れるつもりはなかったが、「戸出が行くなら俺も行く」と言う先輩や同級生がひとり、またひとりと増えてきて、その数は7、8人にも膨れ上がって、「行きたくない」と言える雰囲気ではなくなってしまった。

〝1、2年で帰ってくればいいから〟と自分に言い聞かせるようにしたが、先回は3ヶ月で跳ね返されたと思えば、1、2年は長すぎる。気分はすっかり〝さらば祖国よ〟になっていた。「先に行って下宿先を探しておけよ」と盛大に見送られ、大阪万博でにぎわう1970年夏。羽田を発ち、私は再びパリに舞い戻ってきてしまった。

22歳になっていた。

パンとワイン

カルチエ・ラタンのホテルは経営者が代わっていて、白髪交りのムッシューの姿はなかった。街にもあの暴動の痕跡は何もなかった。

後続連中も次から次とやって来て、狭い部屋で絵を描き、パンをかじり安いワインを飲んで、苦学を絵に描いたような生活を始めた。

金がない、言葉がわからない、食い物が合わない。私は近所の小さなカフェに入り浸って、暇な一日を持て余すような生活を送っていた。

パリに長居をするつもりもなかったから語学学校へ行く気もなかった。最初に日本に引き揚げると言い出すのはシャクだから、誰か先に引き揚げるのを待っている内に1、2年が過ぎた。

そして、また1年が過ぎたころ、友達が誘った。

「戸出さんも釣りをすると言っていたよね、釣り好きな先輩がいるから会ってみる？」

「釣り？」

私は富山県宇奈月温泉で生まれ、実家は旅館を営んでいた。旅館の裏には黒部川が流れ、その轟音を聞きながら育った。イワナやヤマメはいつも身近な魚だった。

子供のころから釣りは日常生活に溶け込んでいたので、「釣り」と言われると興味がないワケがなかった。

「ぜひ、会わせてよ。」

と連絡をとってくれるように頼んだ。

そして後日、友達に連れられてその先輩宅にお邪魔した。先輩は名前を元村平さんとおっしゃり、スラッとした背の高い人だった。

奥さんは対象的に小柄な方で、3、4歳ほどの可愛いお譲さんがおられた。同じ大学の10年先輩とのこと。1年ぐらい前にパリに来られたそうで、学生のころからよく富士山山麓の川へテンカラ釣りに行っていたそうだ。

「そこで、オカアチャンも釣っちゃったよ。」

「私は背の高い人に弱くてね、つい釣られちゃったよ。」

と全く気さくなご夫婦だ。

フライフィッシング！

先輩は熊本県出身の九州男児らしくめっぽう酒が強くて、大いにテンションが上がってきたころ、